

# としょかんNEWS 第93号



2014年12月11日  
湘北短期大学図書館

## 冬休みの読書を応援するお楽しみ企画！！

冬季休暇中の特別貸出を下記のとおり実施いたします。

- ・ 期間 : 12月15日(月)～1月10日(土)
- ・ 冊数 : 10冊まで

ぜひご利用  
ください！



昨年に引き続き、特別貸出の開始に合わせて、みなさんの冬休みの読書を応援するお楽しみ企画を実施します！年末年始にゆっくり読書をしてみてはいかがでしょうか？

### ● 第一弾！福引きキャンペーン

お楽しみ企画第一弾として、「福引きキャンペーン」を実施します。冬休みの特別貸出で本を借りた方全員に福引きのチャンス！おしやれグッズ、図書館キャラクター「さるーち」グッズなどの賞品をご用意して、みなさんをお待ちしています。

抽選会場は、レファレンスカウンターです。賞品の数には限りがありますので、お早めにご参加ください。

- ・ 期間 : 12月15日(月)～12月22日(月)



### ● 第二弾！お年玉キャンペーン

お楽しみ企画第二弾として、「お年玉キャンペーン」を実施します。冬休み明けに「読書ノート」を提出した方全員に図書館オリジナル2015年の卓上カレンダーをプレゼント！季節の「さるーち」イラスト入り。このカレンダーがあれば、図書館の開館スケジュールも一目瞭然。まだ読書ノートをつけたことがない方も、しばらく読書ノートをつけていなかった方も、是非この機会に参加してみませんか？

- ・ 期間 : 1月6日(火)～1月10日(土)



「読書ノート」をつけていけば、自分が学生時代にどんな本を読んだか、その本から何を学んだか、どんなところに感動したか、振り返ることができます。また、レポートやゼミの参考文献リストとして活用しても便利！就職活動の際にエントリーシートや面接で自己PRするときにも役立ちます。ぜひチャレンジしてみてください。

今回ルーエッセイへの寄稿の機会をいただきましたが、テーマに継続性は不要とのことですので、この機会をお借りして、在学生の皆さんへ「図書館を使わなきゃ損」というメッセージをお届けすることにいたします。

新入生ガイダンスの際に、学生証は2年間の湘北短大パスポートなのだとして学生に伝えることがあります。多くの方はテーマパークに1日パスポート券で入園した時、できるかぎり多くのアトラクションを体験して開園時から閉園間際まで目一杯、丸一日パスポートを最大限利用しようとするのではないのでしょうか。授業あり、学友会活動あり、さまざまな体験プログラムありの湘北短大パスポートを手にした限り、できるだけ有効利用したほうが得だと新入生に伝えています。

図書館は、湘北キャンパス内の一つのアトラクションです。図書という情報の宝庫であり、インターネットにつながるPCがあり、そして何よりも、そこには、情報検索や収集についてアドバイスを行うスタッフが常駐しています。この12月、生活プロデュース学科1年生の必修科目「ゼミ

ナール I」において、業界研究のセミナーを図書館で実施しました。興味を持った業界について調べるといふ課題に直面して「そもそも業界って何？」という出発点から、戸惑いながらも就職関連の棚から本を選び、そこから情報を引き出すという作業に受講生が取り組んでいました。この課題では、さらに、雑誌の閲覧ができるWEBサービスを利用して業界関連の情報を得ることも課せられています。就職活動に役立てる情報を得ることを目指して、図書館の機能をフル活用しなければならない課題です。

この課題の本当の目的は、『情報を得る』ことよりも『情報を得る方法そのものを学ぶ』ことにあります。図書館の機能を駆使して自ら必要な情報を得る方法を身につけて、輝く社会人となってもらいたいと願っています。

在学生の皆さんには、授業での取り組みをきっかけに、授業時間外にも図書館なるアトラクションを目一杯活用して、自分自身を磨いてもらいたいと思っています。

## 【連載】館長閑話(14) 子どもに学ぶ<sup>かこさとし</sup>加古里子さんのこと

館長 野口周一

「月刊MOE<sup>モエ</sup>」2013年7月号は、加古里子さんの『『からすのパンやさん』待望の新シリーズ』を巻頭大特集した。また加古さんの「訥々たる」言辞による『未来のだるまちゃんへ』(文藝春秋、2014年)は、「どうして絵本をかくに至ったか」、戦争直後「変幻多様な『子ども』に遭遇し、そこから失っていた人生目標と、生きる力を伝授されたか」等々について述べられた。

私と加古さんの出会いは、私に娘が生まれ、やがて物心つきはじめたころ、私の母が『だるまちゃんとてんぐちゃん』(福音館書店、1967年)を娘に買って来たことに始まる。「だるまちゃん」はいわゆる優等生ではなく、学齢前の5~6歳の男の子、「だるまどん」は加古さんの「不肖の父」がモデルという。それを踏まえて読み直すと、面白さは倍増する。

その後、娘と私は『どろぼうがっこう』『からすのパンやさん』(偕成社、1973年)シリーズに進んで行く。前者は冒頭の「やま また やまのむらはずれに、どろぼうがっこうが ありました」に胸躍り、「ぬきあし さしあし しのみあし どろぼうがっこうの えんそくだ それ!ぬきあし さしあし しのみあし どろぼうがっこうの えんそくだ…」という軽妙なりズムに、娘と私は魅了さ

れたものだった。この度これは紙芝居だったことを知り、加古さんは子どもの心をどのようにつかまえるか学び、「どんな人間でも悪い面を持っているし、最初からいいことだけやらせていけば、全部よくなると思うのは思い違いもはなはだしい」と発言していることに得心した。後者ではおとうさん、おかあさんにチョコちゃんたち4羽の子どもたちも、さまざまなパンを作り、その中には揚げたパンや半焼きパンがあり、「だるまパン」からは「だるまちゃん」を連想したものだった。

さて、加古さんの「失われた目標」とは飛行機乗り、つまり軍人になることだった。それが敗戦で「死に残り」、「せめて人間らしい意義あることがしたいと、生きるよすがを必死で探し」た結果、子どものためにお役に立ちたいと「子どもたちは、ちゃんと自分の目で見て、自分の頭で考え、自分の力で判断し行動する賢さを持つようになってほしい」と願い続けるのである。



『だるまちゃんとかみなりちゃん』を手にとって